



人・家畜・感染症

国立民族学博物館公開講演会 ― グローバル化時代の関係をさぐる

二〇〇九年十月九日(金)午後六時三十分〜九時十五分

会場：日経ホール (東京都千代田区大手町一三ー七 日経ビル三階)

(開場：午後五時三十分)

定員：六〇〇名 参加費：無料

今日の私たちの豊かな食生活や暮らしは、世界各地で生産される肉、乳製品、皮や毛などの家畜が産み出すものに支えられています。

いっぽうで、家畜などの動物から人に感染する、新型インフルエンザのような病気もグローバル化とともに増えています。



人と家畜の関係をとおして、
21世紀における地球環境を展望します。



プログラム

PROGRAMME

- 17:30-18:30 受付
- 18:30-18:35 開会 川合 英雄 (日本経済新聞社大阪本社 編集局長)
- 18:35-18:40 挨拶 須藤 健一 (国立民族学博物館長)
- 18:40-19:15 講演① 「人は家畜とどのようにつきあっているか?」
池谷 和信 (国立民族学博物館 民族社会研究部 教授)
- 19:15-19:50 講演② 「人獣共通感染症をいかに克服するか
—インフルエンザを例に」
喜田 宏 (北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター長)
- 19:50-20:05 休憩
- 20:05-20:40 講演③ 「ブタの弁明—弥生ブタからイベリコブタまで」
野林 厚志 (国立民族学博物館 文化資源研究センター 准教授)
- 20:40-21:15 パネルディスカッション
池谷 和信 / 喜田 宏 / 野林 厚志
司会 南 真木人 (国立民族学博物館 研究戦略センター 准教授)
- 総合司会 信田 敏宏 (国立民族学博物館 研究戦略センター 准教授)

目次

CONTENTS

- 須藤 健一「ごあいさつ—国立民族学博物館の新展開」…………… 1
- 南 真木人 / 信田 敏宏
「講演会テーマ『人・家畜・感染症
—グローバル化時代の関係をさぐる』について」…………… 2
- 池谷 和信
「人は家畜とどのようにつきあっているか?」…………… 3
- 喜田 宏
「人獣共通感染症をいかに克服するか—インフルエンザを例に」…… 6
- 野林 厚志
「ブタの弁明—弥生ブタからイベリコブタまで」…………… 9
- みんなの展示が生まれ変わりました …………… 12

国立民族学博物館長 須藤 健一

はじめに

国立民族学博物館(略称：みんぱく)は、毎年、東京と大阪で公開講演会を開催しています。東京の公開講演会は、2000年から日本経済新聞社のご協力をいただき、今回が10周年の記念すべき講演会になります。今回のテーマ「人・家畜・感染症」は、人間と動物の深いかかわりについて文化人類学と獣医学の視点からのお話です。家畜に起因するグローバルな感染症を考えるうえで、私たちに多くのことを教えてくれる講演会といえます。

東京公演会は、「みんぱく」の研究者たちの研究活動の一端をご紹介すると同時に、文化人類学の方法と考え方の面白さを知っていただき、さらに大阪の「みんぱく」が関東のみならず全国に周知されたいことを願って開催しています。

博物館機能をそなえた研究所

みんぱくは博物館機能をそなえた、世界でもユニークな文化人類学・民族学の研究センターです。昭和49年(1974年)に創設され、3年後に展示場が一般公開されました。

みんぱくは、「地の先へ。知の奥へ。」をモットーに人間文化を探求する旅を続けています。研究者たちは、世界各地で諸民族の社会と文化、そしてグローバル化の影響によるそれらの変化についての調査研究に励んでいます。また、異文化の人びとの生活や価値観をより深く理解するために、民族資料、映像・音響資料、文献図書資料なども収集してきました。この研究成果は展示によって公表され、常設展示場には、約1万5千点の資料が異文化の紹介に役立っています。そのほか、出版・講演会・シンポジウム・マスメディア・

ウェブサイトなどとおして成果が公開されています。

みんぱくでは、現在、特別展「自然のこえ 命のかたち—カナダ先住民の生みだす美」を開催しています(12月8日まで)。カナダ文明博物館とみんぱくが所蔵するカナダ先住民の版画や彫刻などのエスニック・アートと「至宝級」の文化遺産などが展示されています。そのほかにも、企画展示、みんぱく映画会、研究公演、ワークショップ、毎月のみんぱくゼミナールや教員と対話する毎週のウイークエンド・サロンなど、多彩な催しをおこなっています。

また、本年3月には30年ぶりにアフリカと西アジアの展示を新たにしました。今後6年計画ですべての常設展を新構築するなど、みんぱくは新しい事業展開につとめています。

是非、みんぱくに足を運んで知的発見の楽しみを味わってください。



▶特別展のトートム・ポール(ハウスポスト、屋内の柱)ゲリー・マークス、フランシス・ウィリアムス制作。

研究戦略センター 准教授 南 真木人 研究戦略センター 准教授 信田 敏宏

近くて遠い家畜

今日、私たちの豊かな食生活や暮らしは、日本国内はもとより世界各地で生産される肉、乳製品、皮や毛などの家畜が産み出すものに支えられています。しかし、日ごろ私たちが身につけている皮靴やバッグ、毛織物のスーツやウールのセーターなどの原料が、家畜の産物であることは忘れがちです。スーパーに並ぶパック入りの肉や乳製品からは家畜の姿さえ思い描けません。私たちの関心はどうしても、国産かそうでないか、消費期限がいつかといった商品に向けられがちです。日本人にとって家畜はいまや、観光牧場や動物園で見られるものになってしまいました。

今回の講演会では、生活のあらゆる場面で、近くにあるが遠い存在となってしまった家畜を取りあげ、人と家畜の関係とグローバル化にともなう変化について考えてみたいと思います。

人と家畜

人は今から一万年くらい前、ヤギをはじめに一部の野生動物を家畜化することに成功し、その継続的な利用を可能にしてきました。家畜化はイネ科穀物の栽培化とならんで人類史において革命的な出来事でした。紀元前2500年頃からは畜力を用いた農耕や運搬、騎馬による移動あるいは戦闘が始まりました。そうした畜力に取って代わる、内燃機関の原動機(エンジン)の発明によって近代化が促されてきたことを考えると、現代において家畜が私たちから遠い存在になるのは、ある意味で当然のなりゆきでした。

しかしながら、現在でも世界には、家畜がひく犁によって田畑を耕し、畜糞からつくった堆肥を肥料にするなど農耕と家畜飼育が不可分に結びついた生活をおくる人びとが多く暮らしています。そうしたところでは、

その土地に適した在来家畜が伝統的なやり方で飼育されていますが、グローバル化にともない経済効率が高いとされる外来種の家畜に取って代わられつつあります。それによって家畜の飼い方も、放牧をベースに粗飼料を与える形態から、餌のほとんどを配合飼料に依存し、周年で舎飼される形態へと変わってきています。つまり、しばしば工場式畜産(ファクトリー・ファーム)といわれる効率重視の家畜飼育が、程度の差はあれ地球規模で広まっているのです。

家畜由来の感染症

ワールドウォッチ研究所の『地球白書2008-09』は、工場式畜産による環境への影響と家畜の呼吸器および消化器疾患の増加を警告しています。また、画一的な外来種の導入や大規模閉鎖型畜舎での家畜飼育が、鳥インフルエンザといった家畜由来の感染症の拡大と関連しているのではないかと推測しています。要因がそれほど単純だとは思えませんが、このところの人獣共通感染症の頻出と拡大の背景に、人やモノの移動が格段に増加したというグローバル化があることは否定できません。

他方で、世界を席卷する外来種の家畜に対抗し、「イベリコ豚」や「鹿兒島黒豚」などのように在来家畜とその飼い方を再評価し、産地銘柄(ブランド)化して売り出す動きが先進国を中心に増えています。ブランド化は消えかかった在来家畜とそれを育む地域文化を復興させ、持続させる活路となるのでしょうか。あるいは、食の安全をもたらす救世主足りえるのでしょうか。拡大こそすれ止まることがないと思われるグローバル化のなかで、人と家畜の歴史と現状を踏まえ、その健全な関係について多面的に考えてみます。

人は、家畜とどのようにつきあっているか？

民族社会研究部 教授 池谷 和信

1 家畜とインフルエンザ：メキシコ産のブタが提起する課題

2009年4月末、私は、バングラデシュのベンガルデルタにおいて、ブタの群れを連れて移動する集団の調査をしていました。日本で、新型インフルエンザが広がり始めた頃です。帰国後、ブタに接するとインフルエンザに感染するという日本の世論に接し、自分の調査行動を隠そうとする思いが生まれました。

そもそも、今回のインフルエンザ騒動を生んだメキシコ産ブタは、どのような環境で育てられたのでしょうか？その背景には、現地で盛んな「工場式畜産」の方法がウイルスの温床になったともいわれています。ここでは、地球における人と家畜との様々なかかわり方を概観することから始めて、ブタ遊牧の資源利用のあり方を通して、「人・家畜・ウイルスの相互関係」について考えます。

2 人・家畜関係の地域諸相

家畜と人とのかかわり方には、食糧、役畜、ペットなどがあります。メキシコ産のブタは、食肉用に日本に輸入されており食卓につながっています。現在、地球の人口がますます増大するなかで、66億人の食糧資源の一つである家畜への関心が高まっています。また、牛飼育は熱帯林へ拡大し、アマゾンでは大規模な森林破壊をもたらしました。

その一方で、各地域における家畜の役割は異なっています(写真1)。途上国では、インドの水牛やアフリカの牛やラクダが農民の生存には欠かせません(写真2)。先進国では、家畜生産性の向上と肉質を求めて肉のブランド化が進められていま



◀写真1：祖先祭祀の際に供犠されるニワトリ(タイ)。/撮影：増野高司



◀写真2：ラクダを放牧する子供(ケニア)

す。日本では、近年、消えつつある在来家畜やその文化が再評価され、動物園などでそれらを維持する動きがみられます。

3 途上国の人・家畜関係から学ぶ：バングラデシュの在来ブタの危機？

バングラデシュはイスラーム教徒の多い国ですが、ブタの群れとともに移動する人びとがいます。遺伝学の研究によれば、そのブタはユーラシアで最も古い形質を残すものとされ、「イノシシ型」と呼ばれます(写真3)。私は、数度にわたる現地調査から、ブタがどのように群れをつくり、放牧されているのか、持続的にみえる資源利用の形を明らかにしてきました。

ブタ飼育者は、「私たちのブタは病気に強い」と言います。これは、本当でしょうか。雨季(6～9月の洪水期)には、川が氾濫し水面が拡大しますが、ブタは川を泳ぐことができ、そうしたところでも生存できます。乾季には、収穫後の農地が放牧地として利用されます。そこには農民にとっては雑草ですが、ブタにとっては餌になる飼料があり、ブタはそれを掘って食用にします(写真4)。また、自然から得た餌に頼って育てたブタの肉質はすこぶるよいと、彼らは言います。しかし、2009年8月23日現在、バングラデシュ国内でも新型インフルエンザの感染者が100名(9月上旬には500名)を越えたことに伴い、ブタ飼育者は様々な面で悪い影響を受け始めています。



▶写真3：ユーラシアで最も古い形質を残すといわれるブタ(バングラデシュ)。

人獣共通感染症をいかに克服するかーインフルエンザを例に

北海道大学大学院 獣医学研究科 教授 喜田 宏
同大学人獣共通感染症リサーチセンター長



▶写真4: 水田の近くで放牧されるブタ (バングラデシュ)。

4 21世紀の新しい家畜・人関係を求めて

現代の世界の畜産は、急増する肉需要にこたえるために生産性の高い家畜が選ばれ「工場式畜産」が拡大しています。そこでは、家畜は産業動物とみなされ、動物の福祉に配慮しない管理が行われており、感染症の温床になったりしています。その一方、地域の人々が育ててきた在来家畜は消えつつあります。現在、わが国では在来家畜の価値を再評価する動きがみられますが、「人・動物(家畜)・ウイルスの相互関係」の新しい形をめぐっては(写真5)、在来ブタを対象にした遊牧のように人・家畜関係の原点にもどって考えることが必要だと言えるでしょう。

▶写真5: 豚舎で飼育されるブタ。



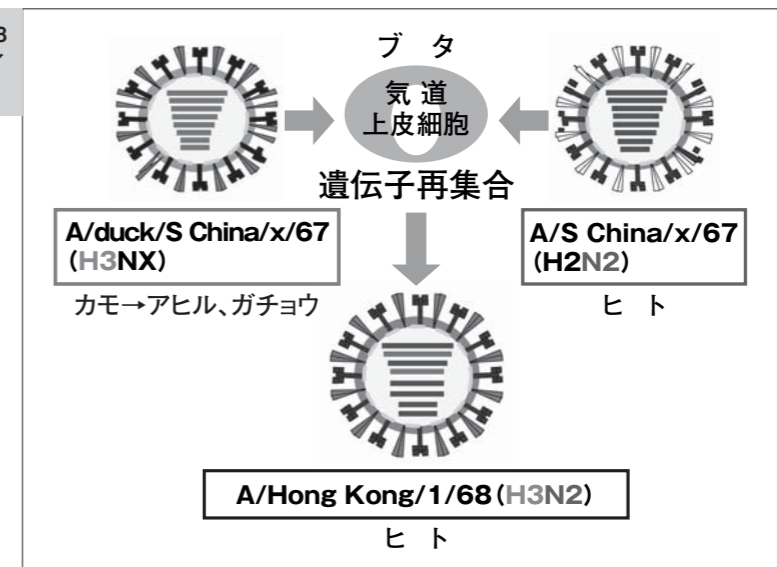
1 はじめに

近年、いわゆる新興・再興感染症が発生しています。これらの多くは、人獣共通感染症であり、その病原体は、野生動物に危害を及ぼすことなく寄生し、自然界に存続してきた微生物です。当面、人獣共通感染症を根絶することはできません。地球規模で自然界における微生物と自然宿主動物のエコロジーを究明してはじめて予防対策を執ることが可能となります。人獣共通感染症克服のための研究・開発戦略基盤として、インフルエンザウイルスの生態学的研究成果を紹介するとともに、鳥、ブタ、そして新型インフルエンザ(ヒトの病名としては不適切)の混乱状況を正したいと思います。

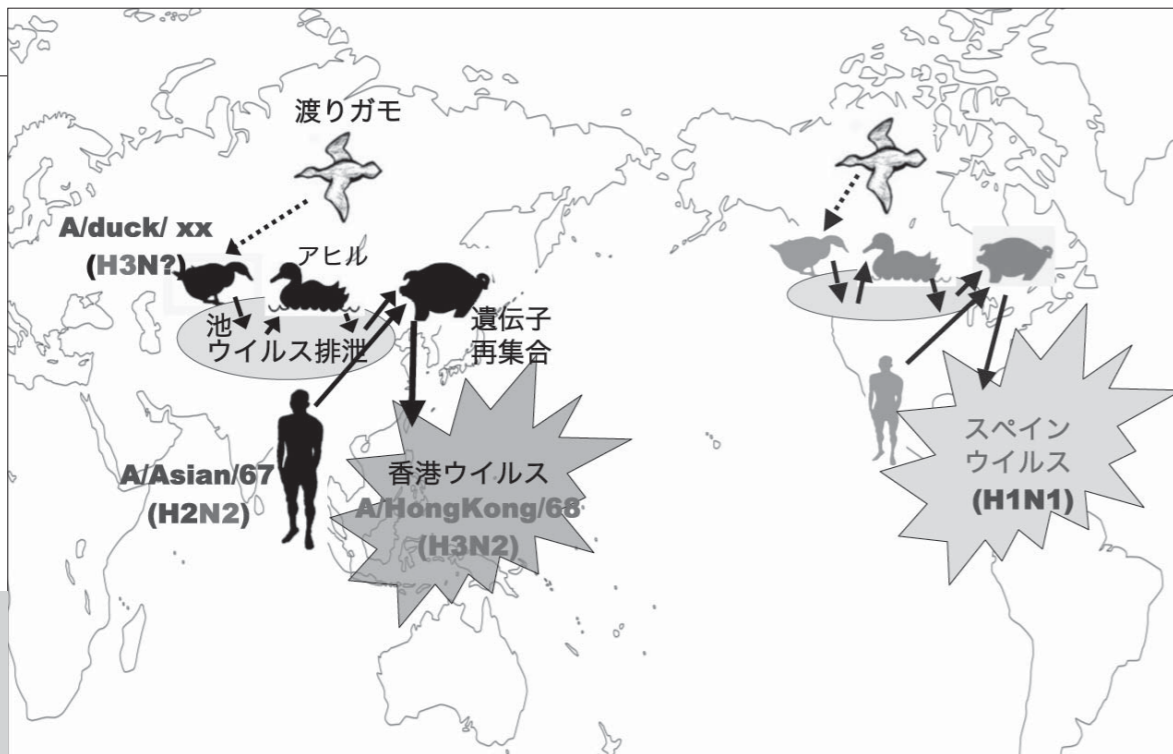
2 高病原性鳥インフルエンザウイルス

H5N1 高病原性鳥インフルエンザウイルスの感染による家禽と野生水禽の被害が、アジア、中東、ヨーロッパおよびアフリカの62カ国に広がっています。これまでに感染と防疫のために死亡した鳥は5億羽を超えます。その内15カ国では、5年間に、計430余名のヒトが感染し、6割が死亡しました。中国、

▶図1: A/Hong Kong/68 (H3N2) インフルエンザウイルスは遺伝子再集合体



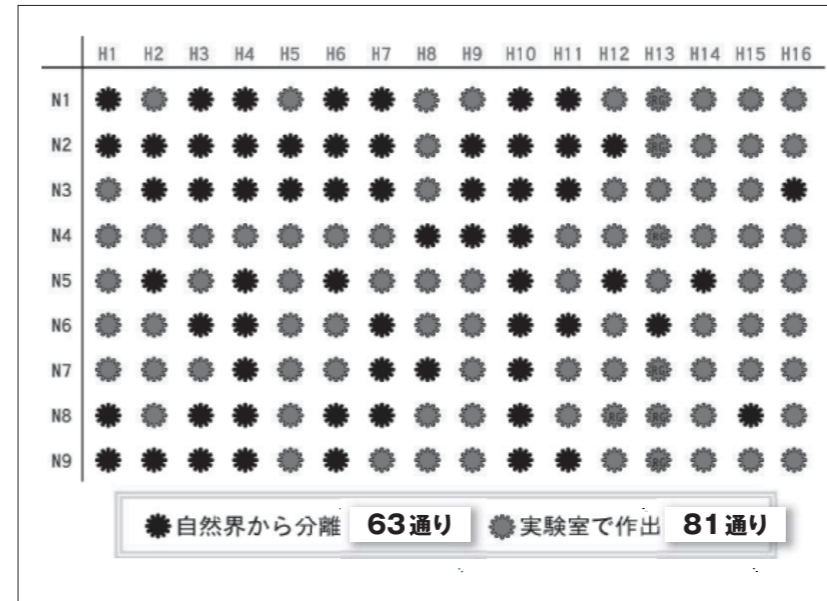
▶ 図2：新型インフルエンザウイルスの出現機序
アジア型ウイルス(H2N2)の出現メカニズムも同様と考えられる。



ベトナム、インドネシアと、2006年からはエジプトで、家禽に不活化ワクチンを接種し、感染鳥の摘発淘汰を困難にしています。その結果、H5N1ウイルスが12年間も感染を持続、拡大し、抗原変異までおこしています。さらには、これら4カ国が、ヒトのH5N1ウイルス感染例数のトップ4になります。

「家禽の感染を早期に摘発、淘汰することにより、被害を最小限に食い止めるとともにヒトの健康と食の安全を守る。高病原性鳥インフルエンザウイルスを鳥に封じ込める。」これが鳥インフルエンザ対策の基本です。

本年4月下旬に、メキシコで、ブタ由来H1N1インフルエンザウイルスがヒトに伝播して、米国カリフォルニアおよびテキサス州にその感染が拡大していることがわかりました。感染はさらに拡大し、WHOはパンデミックの段階に至ったと宣言しました。今や、世界110カ国20万人以上にこのウイルスの感染が確認されています。日本では、5,000人以上にその感染が確認され、拡大し続けています。これを“新型インフルエンザ”と呼び、流行防止を図ろうとしていますが、対策に一貫性は見られません。“毒性”の高いH5N1ではなく、“季節性インフルエンザ並みの毒性の低い”H1N1なので、それまでの“新型インフルエンザ”対策を緩めるとしました。誤解してはいけません。インフルエンザウイルスは毒素ではないのです。また、ブタのインフルエンザウイルスがヒトに伝播してすぐには、ヒトに対する病原性を示すことはまずありません。なぜなら、インフルエンザウイルスの病原性は、感染した宿主体内における増殖の速さと量によって決まるからです。これがヒトからヒトに感染伝播を繰り返すうちに、ヒトでよく増殖する子孫ウイルスが選択される結果、ヒトに対して高い病原性を示すのです。



◀ 図3：インフルエンザウイルスワクチン株ライブラリー 63通りのHAとNA亜型の組み合わせのウイルスがアラスカ、シベリア、モンゴル、台湾、中国と日本で自然宿主であるカモの糞便から分離された(黒)。実験室で発育卵を用いて81通りのウイルスを“遺伝子再集合”(組み換えとは異なる、鳥、ブタなどで自然に起こる)によって作出した(グレー)。144通りのHAとNA亜型の組み合わせのウイルスをワクチンおよび診断抗原製造用株として系統保存した。全てのウイルス267株の病原性(-)、抗原性、遺伝子情報と発育卵における増殖能を解析、データベース化し、ウェブサイトに公開した。
<http://virusdb.czc.hokudai.ac.jp/vdbportal/view/index.jsp>

“鳥インフルエンザ”も“ブタインフルエンザ”も、“新型インフルエンザ”も、ヒトの病名としては、適切ではありません。すべて「インフルエンザ」であることを前提に、対策を講ずるべきです。さらに、日本だけで毎年数千名を死亡させ、数百名の小児に脳症を起こしている、「シーズナルインフルエンザ」の克服こそが、新型ウイルス対策の基盤となることを強調したいと思います。

国	死亡者/感染例
中国	25/ 38
ベトナム	56/111
インドネシア	115/141
エジプト	27/81
カンボジア	7/8
ラオス	2/2
タイ	17/25
イラク	2/3
アゼルバイジャン	5/8
トルコ	4/12
ジボウチ	0/1
ナイジェリア	1/1
ミャンマー	0/1
パキスタン	1/3
バングラデシュ	0/1
合計	262/436

◀ 表1：H5N1高病原性鳥インフルエンザウイルスのヒト感染例 2009年7月1日現在。感染者と死亡者の85%が4カ国に集中している。

ブタの弁明

—弥生ブタからイベリコブタまで

文化資源研究センター 准教授 野林 厚志

1 はじめに

ブタは人間社会の中で非常に利用価値の高い家畜動物と言えます。食肉や皮革を供給するだけでなく、婚資や交換財に使われたり、富や財の象徴として位置づけられてきました。一方で、不浄な動物としてのイメージを付与され、蔑視されたあげく悪口の格好の材料とされたり、ときには摂食や接触が忌避された動物として扱われることもありました。ブタと人間とのこうした関係は大量消費時代の今日、大きく変わりつつあります。家畜の姿を見ることのない消費者が、自分たちにとって都合よく家畜を利用し消費する時代、動物がどのように扱われているかを意識する場面は多くはないでしょう。そこで、本発表ではブタが人間社会の中でどのように位置づけられてきたかを紹介してみたいと思います。



◀図1:福建省で飼育されているブタ。去勢や避妊がほどこされ、菜猪とよばれるようになる。

2 ブタはイノシシの家畜種

ブタはイノシシが、ユーラシアの東部と西部とで別々に家畜化されたと考えられています。ユーラシア西部では、現在のイラン西部からシリア北部にかけての地域で約8500万年前に起こったと考えられています。一方、東部では中国大陸の随所で見られる新石器時代以降の遺跡にブタと同定される骨が見つっています。狩猟活動によってしか捕獲できず、時には畑を荒らし害獣ともなるイノシシと異なり、ブタは人間に

▶図2:かまどの神様に集う動物。伝統的な六畜とは構成が異なる。



▼図3:イベリア半島でドングリを餌にして飼育されるイベリコブタ。



にとって食糧の蓄えを確実に保証する存在となりました。雑食性という生態学的な特性は、ブタに与える飼料に選択の幅を広げ、人間の廃棄物やはては排泄物までも利用することを可能にしました。こうしたことは、ブタの人間社会への適応度の高さを示していると言えます。日本では、縄文時代に狩猟によって獲得されていたイノシシと、弥生時代に飼育されていたブタとの関係がしばしば話題になります。縄文時代に、すでにブタと呼べるような家畜がいたのかどうかは、考古学者の間で、しばしば論争を引き起こすほどなのです。

3 ブタは家畜の優等生

ブタは肉のほかにも、体のほとんどの部分が役に立ちます。血液は詰め物やスープに、皮革は靴や衣服の材料に、内分泌腺は薬品の原材料に、排泄物はメタンガスを発生させるので燃料にもなります。臓器は医療分野の実験にも使われます。また、優れた嗅覚はトリユフ探しの主役たる地位をブタに築かせました。人間にとって余すところなく役にたってきたブタを財産として大切に考える社会は少なくありません。身近な家畜動物を六畜とよぶ中国社会では、ブタは、とりわけ庶民が行う祭礼のときにそなえる大切な家畜とされてきました。

4 家畜動物の位置づけの変化

庶民が、祭礼に備えたり、蓄財の対象とするためにブタを飼養してきた時代から、貨幣経済が浸透し、蓄財は家畜ではなく現金で行うことが当たり前になってきた今日、ブタの社会的な位置づけも少しずつ変化してきました。例えば、中国福建省の客家の人々の社会では、食用とされるブタは去勢や避妊が施され、「菜猪」（食用ブタ）とよばれています。これは、ブタの食肉資源としての性格がより強くなった現象と言えるでしょう。



▶図4: スペインのブタ飼育の様子が描かれた陶器。

みんなの展示が生まれ変わりました

アフリカ展示

西アジア展示

みんなの本館展示のうち、アフリカ展示と西アジア展示が、新しく生まれ変わりました。地球規模の変化の時代に生きる人びとの暮らし。その姿をいきいきと伝える展示が誕生しました。みんなの展示は、今後、順次新しくなっています。ご期待ください。

※実際の展示と異なる場合がございます。

5 イベリコブタ：地域ブランドという新たな存在感

大規模な飼育によって効率的に食肉を生産し、流通網の発達によって安価に食肉が消費者のもとに運ばれるようになった今日、我々が目にするのは家畜動物ではなく、パックにはいったロースやバラとよばれる精肉です。一方で、家畜を育てる生産者は、動物の「顔」が見えるような飼育に取り組んできました。イベリコブタや鹿児島黒豚は、地域で動物を育ていこうとする思いから生まれた、それぞれの地域のブランド動物と言えるでしょう。スペイン南部のアラセナではハムの博物館も建設され、家畜は食糧資源として消費する対象としてだけでなく、文化を育むうえでのパートナーのような存在となっています。

誰が育てたどんなブタかがわかることは、消費する立場にある我々と生産者との関係をあらためて考えるきっかけにもなるでしょう。それは、とりもなおさず、地球上の最大の消費者、人間の立場そのものを見つめなおすことにもなるのです。

▶図5: イベリコハム



コートジボワールのカフェ



砂漠の生活



ヨルバの人びとのビーズ製人像



ベツレヘムの女性衣装



チェフの人びとのカシカの仮面



ファンティの人びとの旗

みんなのウィークエンド・サロン 研究者と話そう

みんなの研究者が展示場に登場し、「現在取り組んでいる研究」「調査している地域(国)の最新情報」「みんなの展示資料」についてお話しします。「それはどうして?」「これは何?」などなど、みなさまの「もっと知りたい!」を、この機会に、どんどんお寄せください。日曜日の午後、みんなの研究者が展示場でお待ちしております。

日時

毎週日曜日 14時30分～15時30分

都合により予定を変更することがあります。

場所

国立民族学博物館 常設展示場

常設展示場観覧料が必要です。

Lined writing area